



日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <https://www.jnpc.or.jp/>



震度7

熊本県で最大震度7を観測する地震があり、イオンモール熊本では爆発で外壁などが大きく崩れた=7月28日午後6時38分、熊本県嘉島町（共同通信社ヘリから）

撮影：平岡 直樹（共同通信福岡支社写真映像部）

駐日大使を終える会見 5年前に就任会見の2人

7月に駐日大使2人の離任会見があった。27日に会見に臨んだ英大使のジュリア・ロングボトムさんは2021年5月に就任会見した。当クラブの事務局長になって初めて迎えた大使だっただけに、感慨深い。日英の関係が以前に増して緊密になった在任期間を締めくくる会見は、4度目のものになった。

イスラエル大使のギラッド・コーヘンさんが就任会見したのも5年前の12月だった。この会見でコーヘンさんは「紛争・戦争」というイメージをイスラエルにまとうせるのは不公平だと訴えた。だが、思いつく裏腹に、在任中はパレスチナ自治区ガザでのイスラム勢力ハマスとの戦闘に関する登壇が重なり、警備の厳重さも相まって、いずれも重苦しい記者会見になった。厳しい質問が予想される中、ことあるごとに自国の立場を強く主張するのだという、大使としての姿勢は際立っていた。

7月21日の離任会見では「真のイスラエルの姿」を日本のメディアはあまり伝えないと語り、ここ数年の一人あたりGDPの伸び、通貨シエケル高の状況を紹介した。また、国民の「幸福度」調査で、イスラエルが世界8位に位置していることも紹介した。戦争をしながら、経済発展する国、国民が幸福を感じる国。確かにそれはイスラエルの強靱性を物語っている。ただ、コーヘンさんはこれらを挙げることで、日本メディアが伝えない、どんな「真のイスラエルの姿」を届けたいと思ったのか、傍らで聞きながら考え込んでしまった。（専務理事 江木慎吾）

クラブ賞推薦しやすく

総務委開き方法模索

日本記者クラブ賞について話し合う総務委員会が7月24日にあった。

2026年度の日本記者クラブ賞への推薦が4件(特別賞は8件)にとどまったことを受け、推薦委員会(会員社のOB・OGで構成)から、推薦を増やす手立てを考えてほしいとの要請を受けての開催になった。

推薦の件数が伸びないことにはいくつかの要因があると考えられる。

最近のクラブ賞受賞者をみると、数年内に著書を出している例が多い。選考基準には「スクープ賞ではなく、特に最近数年間の業績が顕著であることが重視される」とあり、近著が「数年間の業績」を測るために一定の役割を果たしていることがうかがえる。「その存在および業績がジャーナリズムの活性化と成熟にインパクトを与えるような個人を顕彰する」ともあり、かつてはA社に所属する会員がB社の会員を推薦する例が散見された。ただ、このところをみると、ほぼ自社の記者の推薦になっている。注目を集めた書籍の刊行を機に、自社の記者を推薦する

という傾向は、幅広い視野での推薦につながっていない面もある。

推薦は、選考委員と推薦委員の分の資料を整えて申請する仕組みになっている。会社の後ろ盾のない個人会員にとっては、推薦にかかる手間もお金も負担になる。これも個人の推薦や会社の垣根を超えた推薦を難しくしている可能性がある。

こうした個人の負担を減らす方法を総務委員会は模索している。たとえば、一部の推薦を2段階に分けるという試みが提案された。A社に所属する会員を個人会員、あるいはB社の会員が推薦したい場合、詳細な推薦理由とともに事務局に届け出る。これを受けた事務局は推薦理由の書類とともにA社に届ける。A社はこうした自社以外からの推薦があったことを考慮し、当該記者を正式に推薦するかどうか決める。

A社にとって、資料を整える手間は変わらないが、当該記者の社外の評価を知ることができる。その年に推薦に至らなくても、以後、候補と考えることもできる。ただ、この方

法は候補となる人物がすでに会社を離れた個人会員となっている場合は使えないことの方が多いと思われる。また、最初の推薦の締め切りを最終締め切りのかなり前に設定しなければ準備が間に合わなくなるなど、詰めるべき点もある。

2027年度の日本記者クラブ賞については、仕組みを整えた上で、秋に日本記者クラブ賞・同特別賞候補者推薦のお願いに関する案内を送りますので、ご参照ください。

生涯ゴールデンラム 上地結衣さん凱旋会見

7月17日にはウィンブルドンで制し、車いすテニスの生涯ゴールデンラムを達成した上地結衣さんの会見がタイミングよく入った。車いすのため、平にしたステージに先に移動してもらい、後からそのステージがせり上がる、という登壇方式になった。

上地さんの大きく、通る声が印象的だった。上地の力、腹筋を鍛えた結果なのだろうと感心して聞いているが、「声が大きいのは学校の放送部だったので。恥ずかしいんです」とのことだった。

(江木)

目次

▼今月のクラブゲスト

3

▼会見レポート

3・7

渡辺靖 慶應義塾大学教授／稲田朋美 衆議院議員／藤本龍児 帝京大学教授／山口明夫 経済同友会代表幹事／デイモン・ウイelson 世界の民主化を支援する超党派の米非営利財団「全米民主主義基金(NED)」会長兼CEO、市原麻衣子 一橋大学教授／上地結衣 車いすテニスプレイヤー、生涯ゴールデンラム達成／ギラッド・コーヘン 駐日イスラエル大使／ジュリア・ロングボトム 駐日英国大使

▼ワーキングプレス

8・11

米建国250年

日銀 歴史的利上げ

読売新聞社 橋本潤也

サッカーワールドカップ北中米大会

時事通信社 赤間央

中部電力浜岡原発の耐震データ不正

日本経済新聞社 阿刀田寛

静岡新聞社

武田愛一郎

▼日本記者クラブ賞受賞記念講演会

12

▼リレーエッセー

三村明夫さん 日本製鉄名誉会長、元日本商工会議所会頭

加藤修平

日本経済新聞社

▼書いた話書かなかった話

14・15

運転手情報 世界へスクープ
検事の禅問答 悟れず抜かれ

安尾芳典

▼MYBOOKMYPR

16

▼記者ゼミ

17

▼写真回廊

20

今月のゲストの皆さん

出席欄の「会」は会場、「オ」はオンラインの参加人数です。



*下記のゲストの会見レポートは3～7ページに掲載しています

わたなべ やすし 渡辺 靖さん 慶應義塾大学教授

■ 7・1／出席：会33人、オ51人／「アメリカ建国250年」③
／司会：五十嵐文委員

いなだ とちみ 稲田 朋美さん 衆議院議員

■ 7・6／出席：会36人、オ44人／司会：佐藤千矢子委員

ふじもと りゅうじ 藤本 龍児さん 帝京大学教授

■ 7・7／出席：会31人、オ50人／「アメリカ建国250年」④
ポスト世俗化時代のアメリカ／司会：半沢隆実委員

やまぐち あきお 山口 明夫さん 経済同友会代表幹事

■ 7・10／出席：会36人、オ29人／司会：藤井彰夫委員長

デイモン ウィルソン Damon Wilsonさん

世界の民主化を支援する超党派の米非営利財団「全米民主主義基金(NED)」会長兼CEO

いちばら まいこ 市原 麻衣子さん 一橋大学教授

■ 7・14／出席：会21人、オ28人／司会：藤井彰夫委員長／
通訳：池田薫さん

かみじ ゆい 上地 結衣さん 車いすテニスプレーヤー
生涯ゴールデン Slam 達成

■ 7・17／出席：会29人、オ29人／司会：宮内正英委員／代
表質問：鍋田実希さん(共同通信社運動部)

ギラッド コーヘン Gilad Cohenさん 駐日イスラエル大使

■ 7・21／出席：会44人、オ36人／司会：出川展恒委員／
通訳：池田薫さん

ジュリア ロングボトム Julia Longbottomさん 駐日英国大使

■ 7・27／出席：会32人、オ34人／司会：藤井彰夫委員長／
通訳：森岡幹予さん

「アメリカ建国250年」③
渡辺 靖 慶應義塾大学教授

7月1日

「暗黙のルール」が形骸化

米国は独立250周年の節目を、トランプ大統領のもとで混乱と分断を深めながら迎えた。超大国は今後、どこへ向かうのだろうか。

慶應義塾大学の渡辺靖教授によれば、首都ワシントンの独立250周年記念事業は、トランプ氏に関連する団体が実質的に主導。複数の州が協力を見送るなど、国内の対立と分断を色濃く反映しているという。



渡辺氏は、米国を取り巻く課題の根底に、民主主義を支える「暗黙のルール」の形骸化があるとみる。

米国は英国王の圧政への反発を起点とし、権力集中を防いで市民主体で国家を統治する仕組みを採用した「民主主義の実験国家」と呼ばれる。渡辺氏は、実験を成功させるには、憲法で制度を規定するだけでなく、民主主義を支える国民の規範意識が

「暗黙のルール」として必要になると指摘する。

この「暗黙のルール」の形骸化は、トランプ氏の振る舞いに象徴される。同じ国民であっても政敵とみなせば敬意を示さず、大学やメディアに圧力をかけ、私利を追求する―国民共通の規範が揺らげば、各自が独自の「正義」を語り始め、議論が成り立たなくなる。

今後、人工知能(AI)により雇用を奪われ、「犠牲者意識」を抱く国民が増える可能性がある。その感情の受け皿として、右派も左派もポピュリズム路線を強め、分極化に拍

車をかけるおそれがある。選挙における中傷ビジネスの定着も、国民間の感情的な対立を深めるだろう。

ただ、悲観論一辺倒というわけでもない。司法や市場がトランプ氏の権力行使にブレーキをかける場面が散見され、民主主義に課された試練に耐えようとしている。そして、アメリカは驚きに満ちた国であり、衰退論や悲観論を克服してきた国でもある。渡辺氏は、良い意味で予測が裏切られることに期待を示した。

東京新聞デジタル編集部兼論説委員

吉田 通夫

稲田 朋美

衆議院議員

「一歩でも前進すべきでは」

7月6日



「1ミも私たちの言うことと聞かないじゃないですか」。4月、政府の刑事訴訟法改正案に対する自民党の事前審査で、報道陣が退出しようとした際に突然、声を張り上げた稲田朋美衆議院議員。その言動が再審制度の見直しについて、社会の関心を高める一助となったことは確かだ。

超党派議員連盟の一員として、再審開始決定に対する検察官の抗告を禁止する改正法案をまとめた。しかし、党の会合で議論された当初の政府案には、抗告を禁止する規定はない。不規則発言に及んだ時のことを「非常手段。なんで議連案を審議しないのか」という不満が爆発した瞬間だった」と記者会見で振り返った。

会見で何度も言及したのが、自身の選挙区で起きた福井中学生殺害事件だ。前川彰司さんの再審無罪が確

定したが、検察側は無罪につながる証拠の存在を長らく秘していた。

「刑事司法全体への信頼を揺るがしたと裁判所が指摘している。しかしながら反省も謝罪もない」。稲田さんは検察を厳しく批判した。検事が要職を務める法務省が法制審議会の議論を支え、そこでの結論が政府案のベースだ。「反省の上に成り立たないといけない法律なのに、検察の検察による検察のための法律としか言いようがない」と問題視した。

自民の事前審査で政府案は3回修正され、検察官抗告の「原則禁止」が盛り込まれた。一方で十分な根拠があれば抗告できるため、実効性は相対に疑わしい。しかも審査での議論は抗告禁止に集中し、肝心の検察の証拠開示については範囲が限定されたまま、政府案が了承された。稲田さんは不十分さを認めつつ、現行刑事訴訟法で再審に関する初の改正という意義を強調し「一歩でも前進すべきではないか」と述べた。

改正刑事訴訟法は多くの課題を積み残したまま成立した。今回の議論をリードした立場として、稲田さんには再改正に向け直ちに動いてほしい。

毎日新聞社論説副委員長 北村 和巳

「アメリカ建国250年」④

藤本 龍児

帝京大学教授

宗教で読むアメリカ

7月7日



ステレオタイプの米国論が横行するジャーナリズム（ジャーナリズム＋アカデミズム）の中にあつて、新たな視点を提示してくれた100分余の記者会見だった。

藤本教授の論拠は、「トランプ2.0」が単なる世俗化の「揺り戻し」で起きている現象ではないという点だ。ユルゲン・ハーバースの米国観―近代化の先頭を走って来たアメリカは「世俗化理論の巨大な例外」ではなく、実は「世界の標準形」だった―を導入部に、「ポスト世俗化時代のアメリカ」論を展開した。まず、国内対立は「世俗派」VS「信仰派」ではなく、共に宗教を重視する「宗教リベラル」VS「宗教保守」という図式で考えないと理解できない。「宗教保守」は礼

拝への出席など、「高い宗教性」ゆえに共和党支持の傾向があるが、実際には大統領トラン

プ支持は弱い。本音―トランプを好きではないが、民主党に投票するわけにはいかぬ―が見えないのだ。

氏は一つエピソードを挙げた。イラン戦争を仕掛けたトランプは、光彩放つ自身を「神に選ばれし救世主」として誇示する宗教画風AI画像を発信したが、「宗教保守」の反発を食らった。なぜか。「神格化」「神聖化」はトランプ支持の一線を超える、彼は「神の道具」に過ぎないからだ。それは「不信心者」であつても神は「道具」として使う―「聖書」の一節に通底する考えの表れ。支持離れを恐れたトランプは、画像を即刻削除した。

最後に、氏いわく―「宗教保守」がテック・リバタリアンと連携して触手を動かしている宗教空間は、グリーンランド。そこは、新しいイスラエル。トランプが、データセンタ―、資源開発、宇宙産業の拠点にしようとするフロンティアだ―と。

アメリカ研究の泰斗、斎藤眞を信奉し、社会哲学を礎に築いたアメリカ分析は興味深い。だからこそだが、秩序破壊・予測不能性・二面性を備えるトリックスターとしてのトランプ、またトランプピアンによる認知戦・選挙戦術の実態をどう評価するかを改めて聞いてみたい。

専門誌「外交」前編集長 鈴木 美勝

山口 明夫

経済同友会
代表幹事

7月10日

「フェア、オープン、誠実に」

前トップの任期途中の辞任という異例の事態を受け、今年1月に代表幹事に就任した。菌に衣着せぬ発言で、強烈な個性を振りまいた新浪剛史氏に対し「地味」「物足りない」と見られがちだが、気負わず自身のスタイルで財界活動に向き合う姿を印象づけた会見だった。

経済同友会は経営者が個人の資格で参加するため、しがらみにとらわれず自由に発言できる。だが、山口氏は、尖った発言で社会の耳目を集めるのではなく、直面する諸課題に二項対立ではない丁寧な議論を積み重ね、共通理解を得た上で解決にまい進したいと繰り返し。「フェアでオープン、誠実に物事に取り組んでいきたい」と穏やかに語る姿に、人柄がにじみ出ており、この日の会見でもそのたたずまいを見ることができた。

目指す姿を

「共助成長社会」と語った。「経済成長は『必要条件』だが『十分条件』ではない」とし、成長を追い求めるだけでなく、「一人一人に居場所があり、幸せを感じられる優しい社会が理想」と説いていたのも、いかにも山口氏らしいと共感する。

あえて注文させてもらうなら、AI（人工知能）をはじめとする技術がもたらすインパクトや社会変容に対し、よりアグレッシブな姿勢、踏み込んだ発言を期待する。会見では「テクノロジーの進化と経済成長」をテーマに、「潮目が変わったこのタイミングで成長に乗れるか」を語り、日本IBMの経営者として長年テクノロジーの最前線に携わってきた現場感覚、問題意識を明快に示した。技術覇権争いが激化する時代だからこそ、自身の経験、知見を前面に押し出し、日本の「立ち位置」や進むべき「道筋」に独自の視座を示し、議論の火付け役になってほしい。

かつて代表幹事を務めた小林喜光氏は、哲学的な独特の世界観で技術革新を語った。山口氏は別の個性で、テクノロジーを起点に経済社会のありよう全般にテーマを広げ、新たな財界トップ像を確立してほしい。

日刊工業新聞社編集委員 神崎 明子

デイモン・ウィルソン

世界の民主化を支援する超党派の米非営利財団「全米民主主義基金（NED）」会長兼CEO

7月14日

市原 麻衣子

一橋大学教授

民主化支援 説得力欠く



「民主主義国家は議論し、時には葛藤する。そこそが自らの民主主義を自己修正し、刷新する方法だ」。全米民主主義基金（NED）のデ

イモン・ウィルソン会長（写真右）は、民主主義の後退と権威主義国家の脅威、とりわけAI（人工知能）を悪用した情報操作が横行する現状に強い危機感を示した。その対応策として、民主主義社会に備わる「レジリエンス（回復力）」と「自己修正メカニズム」の重要性を力強く語った。その普遍的な理念には深く共感させられた。

しかし会見終盤の質疑応答で、私はその言葉に現実とのギャップを感

じることになる。記者から「米政権によるニューヨーク・タイムズ紙記者への召喚状発行は、米国の民主主義の劣化を示すのではないか」と問われると、ウィルソン氏は「NEDは米国外の活動に特化するマンデートを与えられており、国内事案は扱えない」と明言を避けた。

規程上は正当な回答だろう。だが、会見で権威主義と闘う独立系メディアの保護を訴えながら、自国の権力がジャーナリズムを脅かす事態に「管轄外」を盾とする姿勢には、疑問を抱かざるを得なかった。「真実は民主主義の最も強力な防衛手段だ」というウィルソン氏の言葉は正しい。だからこそ、自国の民主主義のほころびに向き合わなければ、世界の民主化支援において説得力は伴わないのではないか。

同席した一橋大の市原麻衣子教授（同左）は、欧米の支援が縮小する中で民主主義が比較的安定している日本の役割への期待を語った。世界の民主主義が後退する中で、日本は防波堤になれるのか。そして、私たち記者の役割は何か。重い課題を突きつけられた会見だった。

時事通信社国際報道部 村上 顕也

「生涯ゴルフデンスラム」達成

上地 結衣
車いすテニス
プレイヤー

7月17日

「取らずに終われない大会」



「取らずには自分の競技人生終われない」。車いすテニス女子シングルスでウィンブルドン選手権を初めて制し、女子では史上2人目となる「生涯ゴルフデンスラム」を達成した上地結衣選手が、その喜びを笑顔で振り返った。

四大大会通算11勝、パリ・パラリンピック金メダルと数々の栄冠を手にしてきたが、ウィンブルドンだけは何度も挑戦しながら跳ね返されてきた厚い壁だった。

上地選手は芝コートでの攻略法を分析。持ち味の粘り強いラリーではなく、早い段階での攻撃と歴代優勝者が使っていたスライスショットに磨きをかけることで勝機をつかむと決めた。車いすのセッティングも戦術に合わせて見直し、1年間かけて

スタッフとともにプランを練り上げ準備をしてきた。

それでも「精神的にすごく不安な日々があった」という。特に準決勝は肉体的にも精神的にも苦しい戦いとなり、試合後には涙も流した。そして、決勝の相手が過去20勝49敗と大きく負け越していたオランダのデイーデ・デフロート選手と決まると「正直、今回もここまでかな」という弱気の虫が頭をもたげた。しかし、最後は「また、やればいいやんか」と開き直った。結果、一ゲームも奪わせない圧勝劇につながった。

現地に応援に駆け付けていた母と姉を初めてチャンピオンズディナーに同行させることができた喜びも語った。「母がものすごく楽しんでくれていた。こんなに喜んでくれるなら勝って良かった」。姉への思い、日本から応援してくれた父への謝意も口にするなど、偉業達成の裏には家族の理解と支えがあった。

ゲストブックに選んだ言葉は「感謝」。「サポーターしてくださった方、これから出会ってくださる方々と一緒に、自分の競技を高められるような出会いがあったら嬉しい」。人との絆を大切にしている上地選手らしい締めくくりだった。

NHK解説委員室解説主幹 竹内 哲哉

ギラッド・コーヘン

駐日イスラエル大使

7月21日

「平和を求めている」

冒頭発言はイスラエルの経済成長の説明に費やされた。IT、防衛など技術立国として一人当たりの国民総生産(GDP)は過去30年で3倍半に増えた。日本企業の進出も増える一方だ。驚くべき成功である。

だが、離任会見だからと言って、ソフトな質問をするのは、礼を失すると思うので、ここは直球質問だ。

経済成長には確かに目を見張るが、イスラエルが周辺国と平和的な関係を築けばもっと素晴らしい成長が実現する。平和をどうやって築くつもりなのか、と尋ねた。

答えはこうだ。「イスラエルはすべての隣人との平和を求めている」。だが、「在任中のもっとも困難な時



だった」という2023年10月7日のハマスによるテロのような現実があるから、戦う準備をするという。

次にイラン。昨年6月から始め今年2月に全面的な攻撃に踏み切った。イランの抵抗心は衰えず、核問題は前進せず、世界のエネルギー動脈であるホルムズ海峡も封鎖された。中東の安全保障環境は悪化した。体制転換がなければ、イランとは平和を築けないのか。

「いつの日か、イランの指導部が核を持たず、ミサイルで周辺国を脅さず、テロをしない日が来ると希望している。イランとも平和が実現しイランがテヘランにイスラエル大使館の開設を求める日だ。だがそれまでは時に攻撃しなければならぬ」

在任5年間で4回目の登壇だ。クラブ主催のレセプションにも顔を出した。個別のインタビューにも積極的に対応した。いつも情熱的にイスラエルの立場を主張し、しばしば日本メディア、世論との見解の違いで緊迫化した。

離任間際に都内で開かれた会での立ち話で、メディアはイスラエルに厳しいから難しかったろう、と声をかけると、「全然問題ではなかった」と笑って答えた。厳格な言葉から、イスラエルがタフであり簡単に譲らないとよく分かる。平和が訪れるのはいつの日だろうか。

共同通信社客員論説委員 杉田 弘毅

ジュリア・ロングボトム 駐日英国大使

7月27日

日英関係「新たな段階に」



英国のジュリア・ロングボトム駐日大使が、8月の離任を前に記者会見を行った。1989年以來、これまで3度の日本勤務を通じて感じた日本の変化や、英国と日本の協力関係の発展と将来について語った。

英外務省きつての日本通であるロングボトム氏は、冒頭の約30分間、日本語でスピーチした。時代の異なる3度の赴任で目にした日本は、それぞれ別の姿に映ったという。

バブル景気に沸く1989年の日本は、「自信に満ち、世界に向かって開かれ、国際社会に貢献しようという強い意欲を持つ」国だった。2度目の勤務となった2012年の日本は、「自信を取り戻そうとしている国」だと感じた。11年の東日本大震災からの復興の取り組みに深い感

銘を受けたという。そして、大使として日本に戻った21年以降は、「日英関係が新たな段階に進む時期」だったと表現した。

その上で、ロングボトム氏は「3度の赴任を通じて見てきた最大の変化は日英関係そのものだ」とし、両国関係は1989年当時の「親しい友人で、重要なパートナー」から、「安全保障や経済の未来を共に築く戦略的パートナー」へと発展したと振り返った。

こうした両国関係の深化の背景には、欧州連合（EU）離脱後の英国がインド太平洋への関与姿勢を強めたことや、ロシアによるウクライナ侵略に代表される国際的な安全保障環境の変化がある。ただ、この関係を維持し、さらに発展させるためには日本側の努力も欠かせない。

ロングボトム氏はスピーチの締めくくりに、日英両国の絆がいつそう強固なものになることに期待を示し、「日本は外に向かって開かれ、世界と積極的に関わる時に最も大きな力を発揮する」と述べた。37年間にわたり日英関係の第一線で日本を見続けてきた外交官からのメッセージを重く受け止める必要があるだろう。

読売新聞社国際部 蒔田 一彦

記者研修会開催のお知らせ

現役記者対象の記者研修会を8月27日、28日に対面とオンライン併用で開催します。申し込み締め切りは8月20日正午。下記のQRコードからお申し込みください。



【問い合わせ先】

日本記者クラブ事務局（浅田、村上）、電話：03-3503-3766、メール：kaiken@jnc.or.jp

【プログラム】

■8月27日（木）

①災害前線報道手法 発災から伝承まで5局面から考える
熊田安伸 スローニュースシニアコ

ンテンツプロデューサー
災害における報道手法を5つの局面（発災、避難、検証、復興、伝承）ごとにまとめた『記者のための災害前線報道ハンドブック』を刊行した熊田さんが、災害報道の現場で使えるテクニクを紹介します。

②「受け手」の立場に立った災害報道
矢守克也 京都大学防災研究所教授
矢守さんは災害情報論や防災心理学が専門で現在、日本災害情報学会会長、地区防災計画学会会長を務めています。情報の伝え手や送り手ではなく、受け手の視点や事情に立つ

た災害・防災報道の再構築について考えます。

矢守さんはリモート登壇です。会場にはお見えになりません。

※名刺交換会・交流会

■8月28日（金）

③トラウマを聴く前に取材相手の傷を深めず、取材者自身も守る報道手法
河原理子 東京大学大学院客員教授、元朝日新聞社編集委員

性暴力の被害者や事件・事故の被害者家族の取材に長年取り組んできた河原さんと、よりよい取材をするための方法を考えます。講座では簡単なグループワークも行いう予定です。

④ハンズオン講座 きょうからできるデジタルマッピング
齊藤賢太郎 秋田魁新報社電子版マネジメント室部長／記者
クマの出没データなどを使いデジタルマッピングの手法を学びます。

⑤記者のための生成AI活用術
鈴木誠之 イマーシブプレス代表、元静岡新聞社編集局社会部長
生成AIの基本的な活用方法から取材・調査・執筆の各工程での活用例、災害報道に特化したAIの使い方などについて、実例やハンズオンを交えて紹介します。

米建国250年

橋本 潤也(読売新聞社アメリカ総局長)

目立つ「歴史の私物化」

建国理念と現実追う連載

「いつトランプ演説は始まるのか」
独立宣言採択から250年を迎えた7月4日夜。米ワシントン中心部のナショナル・モールで本紙記者とカメラマンは不安を抱えていた。

猛暑の中、長時間列に並び、特設エリアに入ったのが午後7時だが、悪天候の予報のためと、すぐ会場を出るよう促された。参加者に不満や怒りが渦巻く。子どもの泣き声やシ



トランプ大統領は深夜の演説で「アメリカン・ドリームの復活」を強調したが、国民の実感は乏しい(7月4日/読売新聞社提供)

ークレットサービスの怒号が響いた。

参加者はテネシー、アーカンソー、オハイオなどトランプ支持者が多い州から車で来たという人が多い。85万発の花火が目当ての人もいた。テネシー州から家族5人で車で来た日本人の会社員男性(42)は「花火を見たかったが、子どもも疲れたのでホテルに帰ります」と話した。

雨に見舞われ約2時間後に再入場が許されると、再び長い列ができた。記者とカメラマンは、ずぶ濡れの米国人にもまれながら会場入りした。

選挙集会さながらの祝賀

午後11時過ぎ、大物カントリー歌手が「ゴッドブレスUSA」を歌い始め、誰もが安堵した。この曲からトランプ演説に続くのは選挙集会「トランプラリー」の定番だからだ。

案の定トランプ氏が登場し、演説が始まった。内容も選挙集会さながら。愛国心を鼓舞し、軍事力を誇り、宣言したのは「黄金時代の幕開け」。

「米国が共産主義国家になることはない」などと、繰り返し共産主義に触れたのは、急進左派が支持を広げる民主党への攻撃の意図があったのは明らかだ。演説後の花火が終わると、日をまたぎ5日になっていた。

本紙は建国の理念と、トランプ政権下の社会を比較する連載を7月2日付朝刊から掲載した。自由や平等、民主主義など、これまで米国を米国たらしめた価値観が軽視される傾向にあるのではとの問題意識だった。材料は事欠かなかった。

王のように振る舞うトランプ氏。住所だけで機会の不平等に直面する子ども。分断が対話の機会も奪う社会。ないがしろな政教分離。損得優先の「米国例外主義」。いずれも建国の父らが掲げた理想とは、似ても似つかない姿だった。

トランプ氏の誕生日の6月14日。ホワイトハウス前の特設リングで開かれた総合格闘技を取材した記者は、近くでホームレスにブリトーを振る舞うボランティアの姿を見て、そのギャップに言葉を失ったという。

揺り戻しの「芽」も探る

連載には、ジェファークソンやマデysonなど建国の父らの言葉を似顔絵とともに載せた。最近、歴史に焦

点をあてたポッドキャストが人気と聞く。歴史上の人物から教訓を得るような原稿の仕立ては、読者に関心を持つてもらえるのではと考えた。

著名な政治学者サミュエル・ハンチントンは1981年出版の著書『米国政治 約束された不調和』で、米国は自由や平等など理念を追い求める時代と、そうでない時代が交互に訪れると分析している。トランプ政権時代は、後者にあたる可能性があるとの指摘もある。

揺り戻しが繰り返される米国だからこそ、次の揺り戻しの「芽」も探りたいと考えた。ノーベル経済学賞候補にも名前が挙がるハーバード大のラジ・チエティ教授は、国勢調査の情報などを基に、子どもが育った地域と成人後の所得の関係を分析し、子ども時代の環境や「つながり」が将来の成功に結びつくと訴えた。研究目標は「機会が平等に分配される社会」の実現だと言い切る。そこにあるのは、社会を変えたいという意志と米国特有の楽観論だ。矛盾を抱えながらも、理想を求め続ける米国人の物語を、今後も追いかけてい

はしもと・じゅんや▼1998年入社
宇都宮支局 東北総局 政治部のほか
ニューヨーク モスクワ各支局などを
経て 4月から現職

日銀 歴史的利上げ

赤間 央(時事通信社経済部)

総裁・首相が「20分会談」

インフレか景気か、駆け引き

日本の政策金利が約31年ぶりの大台に到達する瞬間だった。日銀は6月16日の金融政策決定会合で、従来の0・75%から1%への追加利上げを議決。中東情勢の悪化で原油価格が高騰する中、インフレの芽を摘む必要があると判断したためだ。一方、高市早苗首相は経済成長を重視し、金融緩和を志向しているとされる。歴史的な利上げを巡る日銀と政府の駆け引きを振り返った。

突然の首相官邸訪問

日銀の植田和男総裁が首相官邸に入った。5月22日午後5時半すぎ、政治部の首相番から連絡が来ると、日銀クラブの金融政策取材班に緊張が走った。6時に開かれる経済財政諮問会議に出席するためとしては、姿を見せるのが早すぎる。会議前の時間を使い、高市首相と会談するのだとすぐに判明した。

歴代の総裁と首相は、経済・物価情勢などを巡り定期的に意見を交換



高市早苗首相との会談後に記者団の取材に応じる日本銀行の植田和男総裁(5月22日/首相官邸/時事通信社提供)

している。会談自体は珍しくはないが、問題はタイミングだった。植田総裁は12日後の6月3日に都内で講演を控えている。利上げに関する何らかの情報発信を行う前に、政府側とコミュニケーションを図る狙いがあると推測された。

会談は約20分間で終了。官邸で取材に応じた植田総裁は「有益な意見交換ができた」などと語った。金融

政策も議題になったが、利上げ時期などの具体的な話は出なかったという。こうした表裏の両面だけで取材を終えるわけにはいかない。会談全体を通じて、首相が利上げを容認するか否かについて、総裁がどのような感触を得たのかが焦点だった。

強かった円安への懸念

「物価の番人」である日銀にとって、独立性は生命線だ。政治的な思惑と切り離され、自主的に政策を決めることで信認が保たれる。ただ、経済政策が全体として非効率的にならないよう、日銀法4条は政府と十分な意思疎通を図るよう定めている。政府の意向を完全に無視するのも難しいのが実情だ。

高市首相は就任後、一貫して日銀に政府との連携を求め続けている。オブラートに包んでいるが、低金利を維持して景気を支えてほしいという意向が透けて見える。昨年12月に日銀が利上げた際は、首相周辺が「あと1年は利上げできない」などと露骨にくぎを刺した。

しかし、今回の会談後に各方面を取材しても、首相が利上げに強く反対した形跡は見られなかった。政府内では「結果責任さえ負うなら、日銀の判断に委ねる」という雰囲気

支配的だった。背景にあったのは、日米金利差による円安だ。今回利上げを見送れば、一段の円売りを招く事態が懸念されていた。

日銀もこうした空気を察知。インフレ抑制は息の長い経済成長につながり、政権の方向性とも合致するとのロジックで押し切る作戦を固めていた。外部環境も日銀に味方した。中東以外からの原油調達が進み、供給途絶による景気悪化のリスクが以前と比べて低下しつつあった。

そして迎えた6月3日。植田総裁は物価上振れの懸念に触れ、「利上げの是非についてしっかりと議論する必要がある」と述べた。思った以上に踏み込んだ発言には、総裁の覚悟がうかがえた。金融市場は6月の利上げを完全に織り込み、日銀も予告通りに政策変更を実行した。

高市政権は今回の利上げは容認したもの、金利上昇が景気に水を差すことを警戒する声は消えず、日銀をけん制するかのような動きも出ている。次回以降の利上げでは、政府と日銀のせめぎ合いが激しさを増しそうだと感じた。

あかま・ひろし▼1999年入社 経済部配属、さいたま支局 政治部を経て再び経済部 2025年7月から日銀キヤップ

サッカーワールドカップ北中米大会 阿刀田 寛（日本経済新聞社編集委員）

乗り継げど選手の声遠く 現場記事広がる「二次情報」

6月から7月にかけて、39日間にわたって開催されたサッカーのワールドカップ（W杯）北中米大会取材した。もうすぐ還暦の私には、毎日の移動がこたえる大会であった。

未明発の航空便で南北往来

ニューヨークやアトランタなど、主に北米大陸の東海岸寄りの都市を南北に往来しながら、外国のチーム同士の試合を数多く受け持った。

未明出発の航空便に飛び乗って、午後の試合開始までに会場にたどり着く。試合が終われば手早く取材をすませてホテルに戻り、深夜まで記事を書きつらねる。やっと就寝したと思ったら、2時間後に目覚まし時計がジャンと鳴る。こんな生活が毎日続けばバテて当然だろう。

高額な旅費を会社に払わせる負い目もあり、それなりに踏ん張らなければと無理な旅程を組んだ自分がわるい。大会が終わった今は「ああまでして現地に行かなくちゃならない

理由って何？」と、取材活動の根本について考えさせられている。

現場第一の精神は記者ならば当たり前。サッカーの歴史的な事跡に立ち会える率直な喜びもある。しかしながらテクノロジーが進歩した今、試合リポートを書く記者が現地の観戦者である必要はあまりない。

映像確認などの面では通信環境に制約の多い現地にいるよりも、日本の視聴者でいるほうがメリットは多そう。公式のメディアアプリに登録すれば、試合後の記者会見などの映像を英訳つきで確認できる。

さらにいえば、会場にいたところでは必ず選手に取材できるわけでもない。アルゼンチン代表の一行などは、ミックスゾーンと呼ばれる取材区画を無言で通り過ぎるのがもっぱらだった。リオネル・メッシご本尊の肉声を直接聞くことができた記者がどれほどいただろうか。

外国チームの担当だったから、取材対象との距離がいつそう遠く感じ



サッカーW杯で優勝し、トロフィーを掲げて喜ぶスペインイレブン（7月19日/米ニューヨーク/日本経済新聞社提供）

られたのかもしれない。だが語学力の不足だけが原因なら、打開策がまったくなかったわけではない。

周りの日本人記者たちはフランス語やスペイン語、ドイツ語で語られる言葉の片々を拾い集めて、様々な翻訳アプリを駆使して日本語に変換し、記事に生かしていた。8年ぶりのW杯取材で感じた最も大きな変化がこれである。

大会を終えた今ならわかる。こうしたテクノロジーを使いつけない私は情報弱者であり、下手な英語だけを頼りに「史上最大のW杯」に挑んだドン・キホーテであった。

鮮魚提供 実は東京経由で

同時にこうも思う。私たちスポー

ツ記者が現場で書く記事は、画面越しの映像や音声、公式サイトでのデータなど「二次情報」をもとにしたものが多くなっている。翻訳アプリの登場によって、その領域がさらに広がったのだ。

AI搭載のアプリが訳した文章は、発言の奥に潜む真意や感情の機微まで伝えるわけではない。人の通訳を間に立てれば望めるはずの、質問と返答のインタラクティブなやりとりから、むしろ私たちを遠ざけるアイテムなのではないか。

コメント不足に窮した記者が、日本の中継動画に流れた選手インタビューの和訳を東京の本社に送ってもらった例などは、滑稽というほかに、目の前で新鮮な魚たちが泳いでいるのに、いちど東京の市場を経由して戻ってきた冷凍食品に箸をつけるようなものだから。

北中米大会は白熱の試合が多く、観戦者としては心から楽しめた。取材者としては、どれだけ移動便を乗り継いでも「選手の声」になかなか到達できない難儀な大会であった。

あとうだ・ひろし▼1994年入社 東京運動部配属となった97年からスポーツ取材にかかわり、主にサッカーを担当。2025年4月から編集委員

中部電力浜岡原発の耐震データ不正 武田 愛一郎（静岡新聞社 東京支社編集部）

安全揺るがす愚行なせ 規制のあり方も焦点に

1月5日の昼過ぎ、取材の足場になっている国会記者会館でくつろいでいると、直属の上司から携帯電話にメールが届いた。「急で申し訳ないが、今から名古屋に行く」「中部電力が浜岡に関して緊急の記者会見を開く」。仕事初めの日に緊急会見？不穏な空気を感じた。本社社会部、浜岡原発がある御前崎市の御前崎支局とも連携し、翌日付の静岡新聞紙面では1面、社会面で大展開した。原発の耐震設計の要である基準地震動データ不正問題の取材は、こうして始まった。

2012年から意図的操作

基準地震動は、原発の敷地で想定される最大の揺れを表す。原発の建屋や機器、設備の耐震設計の大本となる。原子力規制委員会の新規制基準適合性審査で了承を得る必要がある。中部電は規制委の審査会合で、複数の地震動データから平均的な波形を「代表波」として抽出したと説明していたが、実際には都合がいい

波形を選びだし、それが平均にみえるよう残りのデータを付け加えるつじつま合わせをしていた。意図的な操作は2012年から始まっていたとされる。

これだけでも悪質だが、公益通報に基づく規制委の検査が入った昨年5月以降も、データを操作していた。規制委の山中伸介委員長は記者会見



浜岡原発を巡る不正問題について、下村勝御前崎市長らに謝罪する中部電力の林欣吾社長（手前）（1月15日/同市役所/静岡新聞社提供）

で「不正隠し」と断じ、「安全文化の劣化以前の問題。技術者の倫理観の喪失が集団で起きていたのではない」と厳しく批判した。浜岡原発の基準地震動は規制委が9年ほどかけて審査し2023年に了承された。台無しにし愚行としかいいようがない。

地元は戸惑い、落胆、憤り

浜岡原発は、南海トラフ地震の想定震源域の真上にある。ひとたび事故が起これば社会への影響は甚大だ。静岡新聞にとっても最重要テーマであり、歴代の先輩記者が丹念に取材してきた。商業炉として初めて

1、2号機を廃炉にし6号機を新設する特報（2008年12月）を契機にした「浜岡原発の選択」、2011年3月の東京電力福島第1原発事故を受け浜岡のあり方を検証した「続・浜岡原発の選択」というキャンペーン報道も展開した。私も2014年から4年間、御前崎支局に勤務し、どつぶり原発報道に携わった。安全対策に厳しい目を向けてきたつもりだが、不正に気づかず、自らの取材の甘さを痛感するとともに、裏切られたような思いもあり、暗然たる気持ちになっている。

中部電は、対策が十分かどうかは別として、浜岡原発の安全性を高め

る取り組みを率先して講じてきたという印象を抱いていた。国が2006年に新耐震指針を示した際、それを上回る耐震裕度向上工事を自主的に行った。商業炉の廃炉を決断したのは電力会社として初めてだった。原発事故直後、再稼働できるかどうかも分からない中、自ら高さ18メートルの防潮堤を築く取り組みもした。積極的に対策を講じてきた姿勢と今回の不正は、あまりにも落差が大きい。長年原発を受け入れてきた地元住民は戸惑い、落胆、憤りを募らせている。信頼回復はいばらの道だ。

不正の動機は何だったのか、上層部は把握していなかったのか、解明しなければならぬ論点は多岐にわたる。原子力規制のあり方も焦点だ。規制委は、元データを不正されると、見抜くことは「極めて困難」と繰り返し返す。原子力の安全の一義的責任は「事業者にある」との見解も示す。事業者任せで本当に大丈夫なのか、罰則の導入で抑止効果はあるのか、他電力への水平展開は必要なのか――。地元紙として一つ一つ解明し、住民とともに浜岡原発のあり方を考えていかなければいけないと考えている。

ただ、あいちろう▼2009年10月入社 社会部 御前崎支局長 政治部などを経て 24年4月から現職

2026年度日本記者クラブ賞・特別賞 受賞記念講演会

6月29日開催。一般からの参加を含め、参加人数は、会場45人、ウェブ24人

プロ野球「運の強い生き物」

クラブ賞 菅谷齊さん
(ジャーナリスト、共同通信社社友)



「プロ野球を「実に運の強い生き物」と表現する。長嶋茂雄氏が生まれる前年(1935年)、暴漢に襲われ瀕

死の重症を負った正力松太郎氏が一命を取り留めたことがラッキーの始まり。読売中興の祖である正力氏は「希代の興行師」と評される。戦後は外圧。GHQが統治政策の一環として野球を利用、終戦の年に東西対抗を開催させたことが野球発展の礎になった。川上哲治氏の巨人軍復帰を後押ししたのが農地改革。契約金で故郷熊本の本の農地を買い上げ家族の生活を助けた。官営の国鉄がプロ野球に参入できたこともあり。統治政策によってもたらされた今でもある「外圧効果」だ。

チームメイトだった球歴から、王さんのすごさを空振りしない、選球眼がいい、必ず捉えたと評し「今の大リーグなら3割5分、60本塁打以上、150打点。三冠王」と断言した。

50年を超える取材歴で今なおコラムニスト。生き字引で意見番的存在の受賞を王貞治氏は「すごく前向きな人。必要な人」と評して喜んだ。

スポーツニッポン新聞社特別編集委員 宮内 正英

取材のバトン4人でつなぐ

特別賞 東日本放送「旧優生保護法問題」取材班
(高橋直希 東日本放送報道制作局報道部)



私は16歳のとき、子どもを産めなくする手術を受けさせられた――。

受話器の向こうから聞こえた女性の言葉が、記者の心をつかんだ。kh

b東日本放送が、旧優生保護法による被害の実態を追い始めたきっかけは1997年、報道部にかかってきた1本

の電話だった。以後、この問題を担当する記者らが「取材のバトン」をつなぎ、28年にわたるキャンペーン報道で放映されたニュースや企画は200本以上。特筆すべきは、電話の主である飯塚淳子さん(仮名、80代)に記者たちが、寄り添い続けたことだ。飯塚さんの存在が同局の番組で報じられ、それらが国賠訴訟の流れをつくった。講演会では現在の4代目、高橋直希記者(28)がそうした経緯を報告した。被害の声を上げる決意をした飯塚さんは当時、複数の新聞社やテレビ局に同様の電話をかけたという。だが、他社の反応は鈍かった。

「声なき声をすくいあげる」のが記者の役目の一つといわれる。でも、こうして「上がった声」に対し、きちんと向き合ってきたのか。同局の受賞は、私自身の記者生活を振り返るきっかけになった。

毎日新聞社編集局 明珍 美紀

虚偽・誹謗の攻撃を許さず

特別賞 TBSテレビ「報道特集」兵庫県問題取材チーム
(村瀬健介 TBSテレビ報道特集キャスター)

受賞は取材チームが培ってきたジャーナリスト魂の成せる業だった。虚偽や誹謗中傷がSNSに掲載、拡散され、



民主主義が歪められることを看過しなかった。スタッフだけでなく、番組関係者や取材協力者、スポンサー

までがSNSの攻撃にさらされても、取材チームは問題意識を共有し、揺らぐことはなかった。パワハラ疑惑とその内部告発で揺れた兵庫県政、斎藤元彦知事の出直し知事選…と取材を重ね、繰り返し報道した。

複数の自殺者を出すなど痛ましい展開もあった。知事選ではSNSの病理が社会問題として浮き彫りになった。その元凶がN党の立花孝志党首だった。攻撃の矛先を自在に決められるある種の権力者だった。取材チームの報道が警察と検察を動かし、立花党首は逮捕・起訴に至った。ジャーナリズムがSNSの病理に打ち勝ったのである。

テレビや新聞はオールドメディアと揶揄され、「そんな媒体に何ができるのか」と批判される。しかし、取材チームは見事、揶揄や批判をはねかえし、報道の役割を果たした。これからも豊富な経験を生かしてSNSの病理をえぐり出し、ジャーナリスト魂を武器に戦ってほしい。

ジャーナリスト・作家(元産経新聞論説委員) 木村 良一

私が会ったあの人

三村明夫さん 日本製鉄名誉会長、元日本商工会議所会頭 日本を憂えた経営者

加藤 修平（日本経済新聞社）

20代のころ、記者として初めて取材してから四半世紀がたった。この間、三村明夫さんに会うといつも感じる。

「私より若い」

私が素材産業の担当記者となつた2001年9月は激動の時代だった。鉄鋼業も例外ではない。振り返ってみると「失われた20年」が始まっていた。鋼材価格は低迷し、最大手の新日本製鉄ですら先の見えない状況だった。

当時、私が担当していたのは鉄鋼業ではなく、非鉄金属産業だった。キャップとサブキャップの下で働く私は鉄鋼各社の記者レクには出席していたものの、常日ごろから取材をしていたわけではない。

そんな私が三村さんに最初に会ったのは、新日鉄が年末に開く役員と記者の懇親会の場だったと思う。先輩記者が「あの人が新日鉄のエースだよ」と教えてくれた三

村さんは、四半世紀たった今と変わらず、すらっとした人だったと記憶している。

しばらくすると色々な「懸案事項」の取材に私も駆り出されることになり、いわゆる「夜討ち朝駆け」を始めた。サブキャップが対応できない時などに私も三村さんを追いかけるのだが、これがとにかく疲れた。自宅から愛犬の散歩にでかける三村さんの足は、とにかく速かった。

■準備した質問用をなさず

体力だけではない。当時の私は5



三村明夫さん（2026年4月）

年目ぐらいの若手記者だったとはいえ、何人もの経営者にインタビューをした経験があった。業績の見通しや設備投資の方針、組織改革などを聞き出すため、しっかりと勉強して質問するのが企業担当の役目だ。

社長に就任されてからの三村さんのインタビューは全く違った。とにかく日本のことを憂い、政策のことを語られるのだ。もちろんそれが新日鉄の経営にも大きく影響するということなのだろうが、用意した質問が用をなさない私は冷や汗をかくばかり。勉強不足を思い知らされて応接室を出た。

私は取材先と長くお付き合いするのは難しいと感じることが多い。記者は2年ほどたてば担当が代わり、後任がくる。前任者が出てくることを後任は快く思わない。企業経営者は何年かたつと引退され、連絡がとりにくくなる。

三村さんとはなぜか縁が続いた。私が内閣府の記者クラブにいたとき、三村さんは政府の経済財政諮問会議の民間議員を務められた。国の政策を冷静な目で見る三村さんは適任と感じたが、後に民主党政権に移る直前のタイミングでの政府会議で

はご苦労も多かったことだろう。私が24年に経済部長になってからは、日本の政策運営について何度か貴重な意見交換ができた。

■私のこと記事にしてくれた

最近では人口減少について警鐘を鳴らしている。このまま人口が減れば日本は立ちゆかなくなる。危機感を感じているが、三村さんほど将来への責任を強く感じている人は私の身のまわりには見当たらない。今の若者よりも、将来を憂えているのではないかと。

若手だった私ももう50歳。ペテランどころかシニアとも言える年齢になった。それだけ三村さんも年齢を重ねられたわけだが、うらやましいほど若々しい。

そして三村さんは匿名の形だが、日経の紙面で私のことを書いてくれた。新聞記者が不祥事以外で自社の記事になることはあまりない。記事になる喜びを伝えてくれた三村さんに感謝を伝えたい。

（かとう・しゅうへい 1998年入社 素材産業や霞が関の省庁の取材を長く担当 経済部長などを務め 2026年から名古屋支社編集グループ長）

運転手情報世界へスクープ 検事の禅問答 悟れず抜かれ



やす お よしすけ
安尾 芳典

1970年共同通信社入社 堺支局 奈良支局 大阪社会部を経て 東京社会部 外信部 84年～89年ソウル特派員 92年～96年バンコク特派員 整理本部 新潟支局長 2000年に2度目のソウル特派員勤務などを経て 秘書室長 編集委員 論説委員

依然として軍事政権による苛烈な弾圧が続くミャンマー情勢。2021年に国軍がクーデターで実権を握って民主的な政権を倒して以来、抵抗する市民ら多数が殺害された。ミャンマーで注目されるのは、民主化運動指導者でノーベル平和賞を受賞したアウンサンスーチーさんの動向だ。今も投獄後、軟禁状態に置かれているとみられ、健康状態や安否が懸念されている。ミャンマーの取材の焦点はスーチーさんの動向だ。

スーチーさんが最初に自宅軟禁されたのは1989年だった。国軍は、88年に民主化運動を弾圧し、抵抗する市民らを容赦なく殺害して実権を握った。国軍の弾圧に抵抗し民主化運動に立ち上がったスーチーさんは自宅軟禁下に置かれた。

スーチーさんはカリスマ的存在で、国民からの人気が高かった。そ

うしたスーチーさんを恐れた国軍はスーチーさんを自宅軟禁下に置き、国民との接触を阻んだのだ。

スーチーさんは、日本や英国に留学し、国連に勤務をしていた。英国人と結婚し、英国に住んでいた。

スーチーさんが久しぶりにミャンマーに帰国したのは、母が危篤との知らせを受けたからだだった。

その時にミャンマーを長期、支配していた独裁者のネウウィンが辞任したのを契機に民主化運動が起きた。だが、国軍が民主化運動を弾圧し、

多くの犠牲者が出た。こうした状況にめぐり合わせたスーチーさんは民主化運動を主導し国軍に立ち向かった。総選挙が実施され、スーチーさん率いる国民民主連盟(NLD)が

圧勝したが、国軍はこれを無視した。自宅軟禁下にあったスーチーさんは91年、ノーベル平和賞を受賞し、

スーチーさんの動向に世界から一層関心が高まった。

◆軍事政権トップ 解放示唆

この当時、バンコク特派員として、ミャンマーもカバーした。ミャンマーへの入国は困難だったが、95年6月末にようやく入国ビザを得てミャンマーに入った。当時首都だったヤンゴンに到着して、ミャンマー取材でいつも利用しているタクシーに乗り込むと、なじみになった運転手が「スーチーさんが近く解放されるといいう情報がありますよ」と教えてくれた。

この運転手は元教師で、英語も堪能だった。運転手の情報元は政府機関で働く運転手仲間だった。

ちょうど7月1日は自衛隊創設記念日で、在ミャンマー日本大使館では、ミャンマーの軍事政権の要人ら

を招いて、記念パーティーが開かれることになっていた。そのパーティーに参加すると、軍事政権トップのキンニュン第1書記が招かれていた。スーチーさんの自宅軟禁を主導した張本人でもある。さっそく、キンニュン氏に近よった。スーチーさん

の解放について直接聞いてもまともに答えてくれないと思い、「明日、バンコクに戻る予定だが、大丈夫でしようか」と間接的に聞いてみると、キンニュン氏は「戻らないほうがいいでしょう」と答えた。スーチーさんの解放を示唆したものだと感じた。

◆スーチーさん「情報源は？」

この情報を確認するため、当時共同通信のヤンゴン通信員を務めていたセインウィンさんに伝えた。セインウィンさんは、言論弾圧が厳しい

ミャンマーのジャーナリストのなかで最も信頼ができる「大御所」だった。セインウィンさんはさっそく、旧知の軍事政権の情報筋に確認を取るために動き、「解放は間違いない」と連絡してきた。これを受けて「スーチーさん解放」の記事を本社に送った。

完全なスクープとなった。ロイター通信も共同電を転電し、世界に伝えた。報道通り、軍事政権側はスーチーさんの自宅軟禁を解除した。自宅前にあったバリケードは取り除かれ、市民らが続々と集まってきた。

後に再びミャンマーに入り、スーチーさんにインタビューする機会があった。その際にスーチーさんから「私の自宅軟禁解除をスクープしたのですが、どのようにして情報を

得たのですか」と聞かれた。しかし、取材源の秘匿のため言えないと答えた。その際、スーチーさんにユリの花をプレゼントした。その日、自宅前で市民に向け行った演説の際にはそのユリを髪にさしていた。

◆捜査告げる次席の「嫌いだ」

スクープを逃した苦い思いが、東京社会部で裁判所・検察を担当していた1970年代末に起きたタダラス・グラマン事件だ。日本と米国の軍用機売買をめぐる疑獄事件で、大物政治家が関与していたことから、田中角栄元首相が逮捕されたロッキード事件に次ぐ事件となった。

79年、米証券取引委員会(SEC)が、グラマン社が自社の早期警戒機の売り込みのため、商社を通じて日本の大物政治家らに不正資金を渡していたことを告発した。5億円を収賄した大物政治家として名前が浮上したのが、松野頼三元防衛庁長官(当時)だった。

当時、司法記者クラブに所属し、検察を主に取材していたが、当初、検察側は捜査するかどうかなかなか明らかにしなかった。

検察は、警察と異なり、検



自宅で共同通信社との会見に応じるアウンサンスーチーさん(1995年7月14日/ヤンゴン・ミャンマー/共同通信社提供)

事の口が堅く、ネタをとることは困難だった。特に政治家が絡む事件では、検察側のガードは堅かった。

口事件でも特に口の堅い東京地検特捜部の検事がいた。連日の夜回りでも捜査について一切話してくれなかったことから「口なしのコーちゃん」と呼ばれていた。

検事は記者に対して直接的には答えず、「禅問答」で受け答えすることが多かった。その禅問答をどう読み取るかが検察担当の記者側には問われた。

当時、メディアに主に対応していたのは東京地検の次席検事で、1日1回、午前中に記者会見にに応じていた。だが捜査の行方についてはなかなか話してくれなかった。

ある日の定例会見で、次席検事が「ダグラス、グラマンは嫌いだ」と話した。私はこの話を聞き流してしまった。翌日、数社の一面トップに「東京地検、ダグラス、グラマンを本格捜査」の記事が載った。次席検事の「嫌いだ」という発言は、捜査開始を示唆したものだだったのだ。

取材の焦点は、松野氏をいつ事情聴取に移った。検察は松野氏の事情聴取のため、都内のホテルを呼び寄せているとの情報を得た。各社とも松野氏を追ったが、このホテル内

で見失った。果たして検察は松野氏を事情聴取したのか。どの検察当局に取材しても、「ノーコメントかどうかとも言えません」と素っ気なかった。そこで捜査に直接かわって

いないものの、捜査の動きを把握していると見られた東京高検の次席検事の部屋を訪れた。事情聴取したかどうか直接聞くことはできないと思い「禅問答」で聞いてみた。

◆「ボールは当たった」追えず

「松の木にゴルフボールは当たりましたか」と聞いたのだ。事情聴取の相手が松野氏だったので、「松野」の名前を想起させる「松の木」とし、事情聴取を「ボールが当たったかどうか」として、聞いてみたのだ。相手の次席検事は「そう、ボールは当たりましたね」と応じてくれた。禅問答ながら、これで事情聴取は間違いないと確信した。司法記者クラブのキャップにこのことを話し、原稿にしたいと申し出たが、キャップは「これだけでは記事にできない。もう一押し、確認してくれ」と答えた。結局、その後、検事からそれ以上の話を得ることができず、他社に抜かれることになった。もう一押しの取材ができなかったことが悔やまれた。

『データでみるスポーツとジェンダー2026』

稲澤 裕子（読売新聞社出身）
日本スポーツとジェンダー学会会編

スポーツ報道もジェンダー視点を

スポーツを「する」「みる」「ささえる」「知る・学ぶ」の観点から、日本スポーツとジェンダー学会員が分担してジェンダー視点でデータを収集した。筆者は第3章「ささえる」のスポーツ団体役員を担当。女性理事比率は高まったが、トップ層は男性中心の現状が明らかになった。

第2章「みる」では、メディアがテーマの一つになっている。女性アスリートは男性と比べて「美しさ」「感情・表情」で描かれる比率が高く、女性スポーツ中継の少ないことなどが一目瞭然だ。スポーツ記者の女性比率は2005年9%という状況しか把握できなかった。この場をお借りしてデータ整備をお願いしたい。



八千代出版
3,850円

『音楽の見える瞬間 ホワイトハンド コーラスNIIPPONのきせき』

鈴木 款（フジテレビジョン解説委員）

いくつもの壁を乗り越えて
歌声だけでなく、手話をもとにし

マイBOOK
マイPR

た「手歌」をもちいて歌う合唱団「ホワイトハンドコーラスNIIPPON」は、さまざまな違いをもつ子どもたちが創造性を思い切り発揮し、力を合わせて音楽に取り組みインクルーシブな合唱団です。この本は、南米ベネズエラで生まれた「ホワイトハンドコーラス」が日本で花開き、個性ゆたかな子どもたちがいくつもの壁を乗り越えて、ついに音楽の都ウィーンでのベートーベン「第九」の公演を成功させるまでを追ったノンフィクションです。



アルテスパブリッシング
2,200円

『ジョークで読み解く「ロシア近現代史」』

名越 健郎（時事通信社出身）

時代を象徴する傑作を選出

ロシア革命からウクライナ戦争まで百余年の通史を、スラブ文化の至宝であるアネクドット（小話）でたどってみた。内閣府の調査では、日本人の93%が侵略戦争を行うロシアを嫌い、答えたが、現実を諦観して皮肉るジョークの才能は大したもの、その時代を象徴する傑作を選ん

だ。画家レーピンの「ボルガの舟曳き」を模したカバーの絵は中国人イラストレーター作品。「人民日報」にも掲載され、中国人のセンスにも感服した。



PHP研究所
1,320円

『軌むアジア——揺れる米中関係と見えない新秩序』

藤井 彰夫（日本経済新聞社論説主幹）
國分良成元防衛大学校長、伊集院敦日本経済研究センター首席研究員との共編著

アジア各国の戦略変化を分析

2020年代は冷戦後の国際秩序が転換点を迎えた時代と位置付けられるでしょう。その中核にある米中対立とアジア各国の戦略変化を、國分良成氏を中心とした第一線の研究者とともに分析した一冊です。私は第1章で、米国の対中関与政策の変遷、トランプ政権が国際秩序に与える衝撃と今後の米中関係を論じました。他の章では韓国、ASEAN、インド、台湾、ベトナムなど各国の対応を通じて、激動するインド太平洋地域の新秩序と日本の課題を読み解いています。



日経BP 日本経済新聞出版
3,520円

『へそ曲がりの戯言 激動の世相を斜めから読む』

山田 伸二（NHK出身）

激動の時代記した時評集

この本は、2020年から山形県の地方紙「庄内日報」に書きつづったコラムをまとめたものです。私の経済に対する持論は「デフレの亡霊に怯えて」で書き下ろしました。この間、コロナ、東京五輪、安倍高市政権までの政変と、激動の時代でした。通説を排して私はこう考えますという姿勢で、NHKの解説委員の時代より自由に楽しく書かせていただきました。北海道拓殖銀行の格闘、東大寺のお水取りに参籠したルポなど、興味深い話も盛り込みました。



晶文社
2,860円

■会議報告

●第474回会報委員会

（7・6 会場）

委員を退任する共同通信社の森一徳氏、新任の青池雄一・同社くらし報道部長、菊池正史・日本テレビ放送網報道局長、遠山昭弘・日本民間放送連盟番組部長があいさつした後、8月号の編集について協議した。
出席 榊原委員長、田中、青池、高

橋、成田、菊池、遠山、飯山、辻の各委員、森前委員。

●第574回企画委員会

(7・14 9階会場&オンライン)

退任する立石修委員(フジテレビジョン)、新任の五十嵐文・読売新聞社論説副委員長、鈴木博之・共同通信社特別論説委員があいさつした後、今後のゲスト候補について議論した。

出席 藤井委員長、伊藤、青池、行方、佐藤、澤田、永山、橋本、猪熊、五十嵐、奥村、辻本、乾、森田、鈴木(博)、半沢、小林、中村、早川、田中、宮内、今井、出川、山下、岩田、萩原、立石、鈴木(亨)、尾崎、滝の各委員。

●第587回会員資格委員会

(7・17 小会議室)

新任の小川聡・読売新聞社編集局次長、水野雅央・共同通信社編集局次長、辻真・TBSテレビ報道局長補佐、下川美奈・日本テレビ放送網報道局長があいさつした後、8月1日付入退会を審議、理事会に答申した。

出席 福島委員長、清水、小川、水野、辻、下川、松尾の各委員。

●第145回総務委員会

(7・24 10階Bホール)

クラブ賞の応募の活性化について協議した。個人会員からの推薦につ

いて、負担を減らすための新たな方式を一部導入し、来年度から実施することを決めた。

出席 坂尻委員長、福島、藤井、荒井、内藤、川野の各委員、老川理事長、有田副理事長、江木専務理事。

●第252回施設運営委員会(書面)

2025年度と26年度4月～5月の事業収益について報告した。お盆期間の時短営業を決めた。

企画委員長に藤井彰夫氏(日経) 施設運営委員長に川野友裕氏(フジ)

第745回理事会(書面)において、左記の議案が承認された。

①日本経済新聞社の菅野幹雄氏から藤井彰夫氏(同社論説主幹)へ、フジテレビジョンの塚越裕爾氏から川野友裕氏(同社執行役員報道局長)への理事交代が6月の理事会で承認されたことを受けて、菅野氏が務めていた企画委員長を藤井理事に、塚越氏が務めていた施設運営委員長を川野理事に委嘱することを承認した。

②TBSテレビの荒井麻理子氏から木戸誠人氏(同社報道局長)への理事交代を承認した。

③会員資格委員会が審議した8月1日付入退会を承認した。

土曜記者ゼミ

①編

データジャーナリストによる生成AI利用術

7・11/講師…有年由貴子 日本経済新聞社 データジャーナリスト/出席…会場10人、ウェブ31人

記者の相棒にもリスクにも

有年さんは情報収集や処理・分析、コーディング支援などの業務で生成AIを利用している。AIを効果的に使うには、AIに指示する「プロンプト」が重要であり「なるべく細かく指示を出す」ととし、良いプロンプトは「目的、背景、データ、制約、欲しい出力」の要素が含まれていることだと話した。

一方、AIに任せない業務として執筆やデータ結果の検証、妥当性の確認、ニュースの価値判断などを挙げた。有年さんは「AIの出力はあくまでたたき台であり、原典確認や手法の妥当性を専門家に相談、複数の手法で検算して再現性を確認した上で初めて記事化する」と説明。「検証を怠ると誤報のリスクと隣り合わせになる」と強調した。その上で「生成AIは記者の相棒にもリスクにもなり得る。生成AIが使う技術を学び続け、ブラックボックス化しないことを心掛けて」と語った。

調査報道③

京大「JIP論文」疑惑を追う

7・25/講師…須田桃子 科学ジャーナリスト/出席…会場4人、ウェブ14人

■研究不正を追及

2021年に京都大学生命科学研究科の小田裕香子教授(当時は助教)が発表した、「JIP(ジップ)」と名付けられたペプチド(アミノ酸の鎖)に関する研究論文の一部で改ざんがあった。須田さんの取材の端緒は「京大が深刻な研究不正を隠蔽しようとしている」という情報提供とそれを裏付ける内部資料だった。

話を聞いた須田さんは報道の公益性が高いと判断。訴訟リスクも含めて取材を支援する対応を示したスロートニュースでの記事化に向けて本格的に取材を始めた。

告発を受けて京大が設置した調査委員会は、マウス実験で実際と異なる実験条件が論文に記載された一件を改ざんと認定。一方で須田さんによると、論文の肝となる別のマウス実験では不正と認定されなかった。連載1回目には、告発して3カ月後に雇い止めにあった研究員を取り上げ、2回目以降で「研究不正の矮小化」疑惑の問題などを追及するという構成上の工夫もした。

(いずれも事務局)

新しい個人D会員

おおしま みつお
大島 三緒



1982年日本経済新聞社入社。東京本社社会部次長、文化部次長、論説副委員長などを経て、5月退社。2006年に論説委員に就任して以来、20年にわたり朝刊1面の「春秋」を担当。2025年度日本記者クラブ賞受賞者。

長くかかわった1面コラムの筆を置き、新しい気分で世の中を眺めています。AI全盛の時代に、人間だけが書ける文章とは何か。試みを重ねるつもりです。

かさい ちあき
笠井 千晶



1998年静岡放送入社。ディレクター、報道部記者を経て2006年退社。08年から中京テレビ放送報道部所属、15年からフリーで活動。ドキュメンタリー番組や映画を多数手がけ、民放連賞や小学館ノンフィクション大賞などを受賞。

報道記者からドキュメンタリー監督となり10年が経ちました。震災、そして司法の問題など、今後も社会的なテーマを追いつけたいと思います。

ふな たくし
船木 隆



1984年日本経済新聞社入社。浜松支局長、名古屋支社編集部長、東京本社消費産業部長、編集局次長兼夕刊編集長、執行役員、BSテレビ東京常勤監査役などを経て6月退社。

新聞、テレビ、配信に携わり6月から自由人です。探求心を忘れずに幅広くニュースをウォッチしてまいります。よろしくお願ひします。

個人D会員の入会キャンペーンを実施しています。新規入会者（東京、神奈川、千葉、埼玉在住に限る）は1年間、会費が半額になります。また、個人D会員を新たにご紹介くださった方にはクラブ施設で利用可能な食事券・喫茶券あわせて5000円分を贈呈します。詳細は事務局・杉本（03-3503-2727）まで。

情報発信

クラブ施設では会員によるシンポジウムや記者発表など各種会合が行われています。

■向田邦子賞贈賞式

優れた脚本作家に贈られる向田邦子賞（向田邦子賞委員会・株式会社東京ニュース通信社主催）の第44回贈賞式が行われた。ドラマ「シナントロプ」(2025年10月6日～12月22日までテレビ東京系で放送)の原作・脚本を担当した此元和津也氏が受賞した。

(7.7 10階ホール)

■「性暴力を考えつづける」サイト設立会見

性暴力の被害者らでつくる団体「性暴力を考えつづける」がインターネットサイト「プラネチカ」の開設を発表した。「性暴力を考える」ための最新情報や研究、当事者の声を伝える。(7.22 9階会見場)

■令和9年善光寺御開帳記者発表会

数えて7年に1度開催される長野市・善光寺の御開帳。令和9年(2027年)4月4日から6月19日の実施を前に開催概要や催事などを記者発表した。

(7.23 10階ホール)

われ、最近の政治からは反撃能力、

オで涙ぐんだ。

子どもだけは助けたいんでね…、
「そう語りながら美輪さんはスタジ
オで涙ぐんだ。

親が子どもを抱えて黒焦げになっ
ていたそう。自分死んで
子どもだけは助けたいんでね…、
「そう語りながら美輪さんはスタジ
オで涙ぐんだ。

2015年8月に、当時、私が
担当していたBS日テレ「深層
NEWS」でこう語った美輪さ
んは長崎市の出身だ。1945
年8月9日に原爆が投下された
時、爆心地近くの自宅にいたが
奇跡的に助かった。10歳の時だ。
夥しい数の遺体。焼けただ
れ、ウジ虫にたかられた人たち
の長蛇の列。「助けて！」と腕
をつかんできた人の肉が崩
れて、美輪さんの腕にべっとり
へばりついたという。多くの母
親が子どもを抱えて黒焦げになっ
ていたそう。自分死んで
子どもだけは助けたいんでね…、
「そう語りながら美輪さんはスタジ
オで涙ぐんだ。

「日本は大和の国
で、和やかで、みんなと仲良く
する。それから外れたら日本じ
やないんですよ」

歌手で俳優の美輪
明宏さんが、今年6
月20日に91歳で亡く
なった。

大いなる和の真骨頂

武器輸出と勇ましい言葉が聞こえ
てくる。高市早苗首相は「自らの
国は自らの手で守るとの覚悟なき
国を誰も助けてくれない」と語っ
た。しかし、その「覚悟」とは「死
ぬ覚悟」であることを伝えなけれ
ばならないはずだ。身体が肉が崩
れ、黒焦げになる「覚悟」であ
る。「高市推し」の勇ましい人
たちに、その「覚悟」はあるの
か。高市首相に国民を「死なせ
る覚悟」はあるのだろうか。
勇ましいばかりで大局観に欠
け、いざとなれば逃げだし、責
任も取らない「残念な人」たち
が多かったことは、日本の敗戦
の歴史が物語っている。
「文化こそが日本の真骨頂だ
ということを再認識して、自信
を持つてほしい。そうすると世
界から尊敬されるではありませ
んか。喧嘩売るところなんかあり
ませんよ。戦争なんかできません」
生き地獄を見た美輪さんのこの
言葉にこそ、敗戦を経験した日本
の「あり方」、「国のかたち」があ
るように思えてならない。
日本テレビ放送網報道局長

菊池 正史

レストラン*価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731
和食 葉月お献立 (8/31まで)

先付前菜：鰻けんちん巻き、薄氷青梅、水菜と鶏のひたしなど 椀：海老つみれ 舞茸、大根など 造り：旬魚三点盛り 焼き物：太刀魚ずんだ焼き 揚げ物：蟹黄金揚げ、なす挟み揚げなど 食事：十六穀米焼きおにぎり茶漬け 甘味：フルーツたっぷりゼリー寄せ (5,500円) (板長：内海圭史)

洋食 季節のおすすめコース (8/31まで)

真鯛のカルパッチョ 柚子香るヴィネグレットソース、冷製トマトクリームスープ、和牛イチボのカットステーキ 粒マスタードソース、マンゴーのタルト、コーヒーまたは紅茶、パンとバター (4,400円)。ランチ、ディナーともに9階レストランでもご提供します。(シェフ：佐藤和治)

アラスカ「夏の特別ディナー」8月28日まで

レストラン・アラスカの夏の会員限定特別ディナーコースが好評です。通常価格1万円のところ5,500円(税込み)でご提供します。

ご予約は電話03-3503-2731まで。10階レストランが貸し切りの場合は、9階レストランでお召し上がりいただけます。

ラウンジ喫茶券がお得です

ラウンジの喫茶券は20枚つづりで4,224円(税込み)で、ドリンク1杯あたり約211円です。コーヒーは現在、1杯330円ですので約119円近く安くなります。ラウンジのレジでお求めいただけます。

会員情報変更のお届けを

会員の入退会には所定の「変更届」を事務局へお届けください。役職変更のみの場合もお知らせください。個人D会員の皆さんで住所やメールアドレスが変わった場合はご連絡ください。

お問い合わせは事務局の杉本(電話03-3503-2727)まで。

今後の行事予定 (8/3現在)

21金	14:00～15:30 10階ホール 「中国で何が起きているのか」③ 山口信治 防衛研究所主任研究員
25火	13:00～14:15 10階ホール 「熊本地震 発災1カ月」 日本赤十字社職員による報告会見
9月7日	17:00～18:50 10階ホール 試写会「東京上空300メートル」 首都上空を飛び交う米軍ヘリの実態に迫った調査報道を基に毎日新聞社と映画監督の大塚敦氏が共同製作したドキュメンタリー映画。

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階) ☎3503-2723 ●会員事務 ☎3503-2727
- 洋食レストラン(10階) ☎3503-2766 ●経 理 ☎3503-2728
- 貸室予約、宴会打ち合わせ ☎3503-2724 ●クラブ行事への申し込み ☎3503-2722
- 受 付 ☎3503-2721 ●会見申し込みアドレス: kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員: 119社 ●基本会員: 686人 ●個人会員: 958人
- 法人・個人賛助会員: 55社・116人 ●特別賛助会員: 95人
- 名誉・功労会員: 13人 ●学生会員: 103人 計174社・1,971人

沖縄タイムス 戦後80年企画が本に

沖縄タイムス社の戦後80年の節目に合わせた連載企画が書籍化されました。企画を担当した同社の福元大輔さんにご本の紹介文をお寄せいただきました。

沖縄タイムス社編『語り、聞く 沖縄の戦世 戦中・戦後の生活史』

国内で唯一住民を巻き込んだ凄惨な地上戦が展開された沖縄で、一人でも多くの体験を聴く。沖縄タイムスでは戦後80年企画で、一般公募に応じた「聞き手」30人が、戦時の記憶を持つ「語り手」を思い思いに選び、その語りを聞き取り、1万字にまとめました。計30篇の生活史を収めたのがこの本です。

父母やきょうだいを失った記憶、疎開先で「ひーさん、やーさん、しからーさん(寒い、ひもじい、さみしい)」と涙を枯らした思い出などを語っています。親しい家族や友人とゆんたく(おしゃべり)する中で、ふと出た言葉であり、初対面の記者では聞き取れない声が多くあります。重みや悲しみをたたえた言葉や声は、次の戦争を防ぐ防波堤になってくれると信じています。福元 大輔(沖縄タイムス社論説委員兼政経部長)



みすず書房
3,960円

会員社の本をご紹介します

紙面での連載や企画をまとめたご本など、会員社が出版した書籍をご紹介します。詳細は事務局の西村(電話03-3503-2729)まで。

<法人代表変更>

- ・産経新聞社 羽成哲郎 代表取締役社長 (旧 近藤哲司氏)
- ・福島民報社 安斎康史 代表取締役社長 (旧 芳見弘一氏)
- ・テレビ愛知 丸谷浩史 代表取締役社長 (旧 藤井達郎氏)

HP情報

<https://www.jnpc.or.jp/>

音声アーカイブ 会見の音声記録

●ノーベル賞・利根川進さん 会見音声公開中

先月死去した日本人初のノーベル生理学・医学賞受賞者の利根川進さんは1988年3月に、クラブで会見しています。当時の写真と会見音声を公開しました。また会見詳録(文字記録)もあります。



会報委員会

- 委員長=榊原 智
- 委員=青池 雄一 飯山 雅史 勝田 洋人 鴨下ひろみ 菊池 正史 高橋 清子 田中 成之 辻 篤子 遠山 昭弘 成田 浩二

(事務局: 西村志織 本庄五月)

☎03-3503-2729 FAX 03-3503-7271

撮影：相川^{あい かわ} 直輝^{なお き} (産経新聞社写真報道局)



夕日を浴びて力走する「SLばんえつ物語」。牽引するC57形はその美しい姿から「貴婦人」の愛称で親しまれている
＝6月13日、新潟県五泉市

シュツポッポの律義者

機関車という乗り物は、子どもがシュツポシュツポと口ずさみ両手をくるくる回して走りたがるように、どこか人間味を感じさせるようである。明治生まれの作家芥川龍之介は「機関車を見ながら」と題した随筆の中で、軽妙の書き手斎藤藤緑雨の有名な、箱根の山に登る機関車の「ナンダ、コンナ山、ナンダ、コンナ山」という叫びを引いている。続けて碓氷峠を下る機関車は「タカボコ高崎タカボコ高崎」と喜び軽快である、と。そう言われれば、そんな声が聞こえてきそうだから不思議である。

知られるようにソ連の経済学者ニコライ・コンドラチエフはおよそ50年周期で上下する景気の波を唱えた。波はイノベーション(技術革新)が起こす。第一の波は蒸気機関が起こした。産業革命である。第二の波は鉄道や電信、第三は電気・自動車、第四がエレクトロニクス、第五はIT・生命科学などといった具合で、機関車は人や貨物だけでなく景気も魔人のごとく引つ張った。

擬人化では、芥川と似た時代の中野重治も「機関車」と題する詩を書いており(彼は巨大な図体を持ち／黒い千貫の重量を持つ／／彼の走るとき／軌道と枕木と一せいに震動する／と、まるで疾駆する巨人。上の写真のC57(鉄道ファンはシゴナナと呼ぶ)は動輪が大きく、また全長に比しボイラーが細身で長いので貴婦人の愛称をもつ。

さて中野の詩はこう続く。(常に煙をくぐって千人の生活を搬ぶもの／／輝く軌道の上を全き統制のうちに慕進するもの／その律義者の大男の後姿に／おれら今あつい手をあげる)。男でも女でも構わないが、機関車が今なお愛されるわけは、この律義者という一語に尽きるのではなからうか。ほら聞こえませんか。ナンダ、コンナ坂、負ケルモンカ、シュツポッポ……。 (中日新聞社出身、深田 実)